

第2分科会

テーマ「幼・保一小連携と子どもの育ちの見取り」

—幼小のなめらかな接続のための“遊び”と“学び”の関連性・連続性を考える—

講師 木村 吉彦先生

上越教育大学大学院教授

運営責任者 西澤 由美子 南長野幼稚園

司会者 青木 洋子 南長野幼稚園

記録者 中島 千詠子 若穂幼稚園

記録者 川崎 愛子 若穂幼稚園

内容：幼小のなめらかな接続のためには、幼児期の生活や遊びを通しての教育と、小学校の教科等を中心とする教育の違いをしっかりと把握した上で、円滑な接続をめざしていくことが大切です。その具体的な手立てとしての「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」についてその定義や意味付け、そして作成のポイントについて学び合いましょう。

講義：〇幼・保一小連携の重要性とキーワード

最初に連携の大事さから話をさせていただきます。子どもにとって幼児期から小学校教育へ入るというのは、**遊び中心の生活から教科学習中心の生活へ**と生活スタイルが変わるということです。幼稚園の場合は教育要領という名称です。対して小学校は学習指導要領です。かつて比較して論文を書いたこともあるのですが、幼稚園教育要領は“子どもを全人的に育てる”、教育全般についての要領なんです。それに対して小学校の場合は本当は子どもを全人的に育てなくてはいけないのに、「お前は勉強しろよ」「テストやるからちゃんと覚えろよ」そんな学習指導が中心で、教育の違いが要領の名前自体に表れているのです。私としては子どもを全人的に理解して育てるのが、本来の教育の姿だと思いますので、小学校でも学習指導だけで終わるのではなくて、全人的に育てましょう

いろいろな所でしゃべっております。どちらも共通しているのが“学び”です。幼児教育では遊びを通して様々な資質・能力を身に付けている生活を送っています。私はこの様々な資質・能力を身に付けるけることを“学び”と定義づけています。“木登りしたい”と自分で決めて「よいしょ」と頑張ってるわけです。そうすると筋力、体力がつきます。私は目測力という言葉を使っていますが、どれくらい腕を伸ばせば上の枝に届くとか、どれくらい足を上げれば次の枝に乗れるかという、まさに目の力です。目測力を身に付けています。砂場でごっこ遊びをしていると人間関係ができますし、その中でコミュニケーション力も付きますし、言葉の力も付きます。もちろん砂ってサラサラして気持ちがいいとか、水が入るとこうなるのかという感性も伸びています。そういう感覚的な部分から人との関わりまでいろんな資質・能力を身につけているのが遊びの持つ意味です。“学び”というと小学校以上の先生方は教科書を使って学ぶことだと勘違いされていますが、幼児期の子ども達は大いに学んでいます。学びの中身が違うだけで同じように学んでいるんだということを確認させていただきます。その時の育ちの違い、質の違いということもありますが、幼小両方とも学んでいますし、育ってまいるのです。

そもそも連携とは「同じ目的を持つ者が互いに連絡を取り、協力し合って物事を行うこと」です。

5歳児さんと小学校1年生だけの問題ではなくて幼児教育を担っている先生方と小学校全体の先生方がそれぞれの見方や考え方を知り、分かりあえる、理解し合う**相互理解**が連携の最初のキーワードだと思います。10年前に上越教育大の大学院に宮城県から来た小学校教諭が調べて、一番印象に残っているのが、幼稚園の先生方がめざす子ども像です。こうやって小学校に送りますというめざす子ども像のアンケートトップが、「主体性を育て、リーダーシップを発揮できる子ども」でした。そして保育園の先生は、「主体性のある子どもプラス躰の行き届いた子ども」でした。それに対して、上越市内の小学校の全担任の先生から出された新入児童に期待する子ども像は何か。それは「従順さ」というのが一番でした。つまり人の言うことを素直に聞く、先生の話をよく聞く、小学校教師である彼も同じことを言っていました。つまり、幼児教育の先生達がリーダーシップを発揮する子が理想だと思って小学校へ送り込んだ子どもが、小学校の先生方からは、自分勝手じゃないか、私の話を聞いてくれないんじゃないか、従順さがないのではないかと見誤られる残念な怖さがあります。それだけ同じ教育に、そして同じ子どもに携わっていながら求める子ども像が大きく違うのです。そこで相互理解が本当に大事だということを確信しました。

2つ目は、**互惠性**です。これはお互いにメリットが見いだせる活動のことです。例えば、近くの5歳児さんをよんで“遊びランド”をやりますと柏崎市の小学校の先生が指導案を送って下さったのですが、小学校1年生にとってのめざす子ども像と、1年生のメリットしか書いてなかったのです。私は指導案に書き足してほしいと伝えました。1年生に対する授業のねらいと同時に5歳児さん

にとって小学校への期待が引き出せるというメリットがあります、と。小学校の教師だから、授業だから、小学生の育ちだけめざすのは不十分です。逆に言うと先生方、小学校にお邪魔する時、5歳児にとっては、こういう姿をめざしていますので、一緒に授業を受けさせて下さいとお伝えいただきたいと思います。これも相互理解につながります。これからこういう授業をたくさんやっていただきたいです。こちらからの思いや願いもしっかり伝えていただいて、両方の子ども達がしっかり育つという交流授業を考えていただきたい。逆に幼稚園に小学校1年生を呼ぶ場合は1年生にとっても、こういうメリットがあるのではないかということをお小学校の先生に伝えることによって、また来ますというやる気が引き出せると思います。要はお互いにいいことがないと長続きしないのではないかと、ということです。子どもにとっても絶対いいことがあるので、そこを大事にした交流授業を実現していただきたいです。以上、連携の話をさせていただきました。

○幼児教育と小学校教育の違い

これから私の教育学者としての発想から、幼児教育と小学校教育の違いを資料をもとに話を進めさせていただきます。具体的には、教育の目的論、方法論、評価論の3つの観点から、両者の違いをお話します。

特に目的論、方法論が一番わかりやすいかと思います。そちらを中心に語らせていただきます。保育所保育指針における教育に関するねらいは幼稚園教育要領と全く同じになっています。行政的には二元ですが、保育内容に関しては一元化されていると思います。領域が5つあるうちの最初に「健康」があるわけですが、幼児教育の教育目的は、**育てたい（めざす）子ども像や、子どもを育てる方向性**を示してあると書きました。具体的に話します。

領域「健康」のねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう
くことのできる子ども>。(心情)
 - (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとするくことのできる子ども>。(意欲)
 - (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付けるくことのできる子ども>。(態度)
- () 内に、心情、意欲、態度と書きましたが、これは私の解釈です。5領域全て、ねらいが3つずつ出てまして、それが全て、心情、意欲、態度ときれいに並んでいると思っています。

さらに具体的に言いますと、2番目「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとすることのできる子ども」。これは運動好きの子どもを育てて下さい、と読み取れますね。例えば、私が訪れた幼稚園で、太郎ちゃんが縄跳びを一生懸命やっている姿から「10回超えたね。20回超えたね。偉いね。」とどんどん褒めちぎってやる気を引き出そうとします。まさに運動好きな子どもを育てようとした。そして運動好きという方向に**子どもを育ててほしいという方向性を示している教育目標のことを「方向目標」と**言います。

それに対して小学校へ行きますと、縄跳び名人カードなんてありませんでしたか。縄跳び名人カードの事例で言いますと、小学生1年生の場合1分間で前廻り30回以上とします。すると、幼稚園時代に「縄跳び大好きだよ」と一生懸命やっていた太郎ちゃんが26回、28回でとどまるとスタンプはもらえません。これを**到達目標**と言います。確かに達成感を持てるというのは大事なんですけれども、幼児教育では、方向目標中心に運動好きであれば、十分育っていると捉えていいわけです。そうやって育てられた子どもさんが、小学校へ入ると、30回できてないじゃない、30回までできたよという到達目標に基づいて学習を進めるのが、小学校教育の中心なんです。方向目標

と到達目標のどちらも大切ですから、この違い、まず教育目標の違いというので確かめていただきたいです。

次に方法論ですが「環境を通して行う教育」が幼児教育です。それこそ教育要領で一番最初に出てくる言葉ですから、幼児教育の本質です。私、環境を通して行う教育のことを**間接教育**と名付けているんです。具体的な事例で言いますと、5歳児担任の男性教諭が園庭で楽しそうにサッカーをやっていました。それを見ていた5歳さんと4歳児さんが集まり「僕達もサッカーやりたい」と言いだしました。そして、5人ずつでチームを組んで「サッカー大会やろう」とサッカーが始まりました。これはまさに**間接教育、環境を通して行う教育**ですね。

子ども用でいいですから、大きめのボールとサッカーゴールが用意され、それを使って遊ぶことでサッカーを楽しめる、それを**物的環境**とよびます。それに対して、サッカーってこんなに楽しいんだよ、ゴールできたらこんなに嬉しいんだよというモデルとしての教師の役目は**人的環境**とよんでいます。ですから物的環境、人的環境を含めたまさに保育環境です。その保育環境で行う教育方法を間接教育とよんでいるわけです。定義を言いますと、**間接教育とは、教（保）育のねらいや目標を学習（保育）環境に反映させることによって、学習者（子ども）の主体的な活動を誘発しようとする教育の方法である、**ということです。

生活科で「秋を見つけよう」、「秋を探そう」といった活動では、教室に赤や黄色の葉っぱ、ダンゴリを持ってきて「いいか、これが秋だぞ、覚えろよ。」なんてやりません。実際に一番近くの公園に出かけて、先生が「おととい、この公園に来たんだよ。」「ほらこんなの見つけたよ。春の頃は緑色だったのに、赤いね、黄色いね、茶色いね。今までなかったけれど、こんな実があったよ。」など

秋を見つけて、秋と遊ぶというモデルとしての教師の姿を子ども達に示し、「これから秋を見つけに行こうね。」などと言いますと、児童一人一人が公園を回って、自分なりに秋を見つけようとします。実は生活科の教育方法の中心は間接教育なんです。幼児教育と同じなんです。そうやって物的環境、人的環境をもとに、子ども達の主体的な活動を誘発し、引き出そうとする教育・保育の方法を、間接教育と私は言っています。

ところが小学校になりますと、生活科以外の場合は「教科書出しなさい。」「この言葉の意味、調べた？」「わからない？」「じゃあ、これから調べなさい。」とか直接的な指示・命令に基づいて教育を進めるのが中心ですから、それを直接教育と言っています。体育なんかで「ピー、集まれ！今日はサッカーだ。」それも直接教育です。子どもたちが是非サッカーをやりたいと思わせるような環境作りなどしてません。教育の方法論で言うと、幼児教育と小学校教育の方法は間接教育と直接教育の違いであることをお伝えします。

教育評価の観点ですが、今、小学校の方もいわゆる絶対評価という時代に入っているのです。幼稚園教育では当然ながら他の子と比べて「太郎ちゃん、次郎ちゃんを見なさい。」「次郎ちゃんのように立派になりなさい。」とは言いません。他児と比べることを相対評価というのですが、小学校も一人一人の子どもの育ちをしっかり見取って、評価をする絶対評価の時代です。評価＝子ども理解の時代です。人と比べるのではない絶対評価。その子一人一人の育ちを理解する、見取る。小学校でも大事だと思っているのですが、幼児教育では、人と比べるんじゃなくて、一人一人の子どものかっつの姿と、今の姿を比べて伸びを認めて褒めてあげる。それを個人内評価と言います。これは一番大事な幼児教育における評価の基本です。そして幼稚園幼児指導要録には子どもの姿を文章化し

て書き出してもらいます。まさに子どもの伸びの姿をそのまま書き出していただきたいと思います。絶対評価に基づく個人内評価が幼児教育にとって一番大事な子ども理解のあり方だと思います。

さらに大事なことは、今では全てが絶対評価の考え方に基づき「一人一人の生きる力」の育ちが評価の対象である時代です。これは全教育共通です。「生きる力」とは「いかに変化の激しい社会にあっても、主体的に自分の人生を生き抜こうとする力」です。いかに変化の激しい社会にあっても「教師を続けるぞ」など自分の人生を主体的に生き抜こうとする力、それを大事にして生きていただきたい。その前提となる幼児教育は絶対評価に基づく幼児理解のあり方だと思います。ご自分がやってらっしゃる子ども理解、それをいい意味に評価と捉えていただいて、自信を持って子ども理解に努めていただきたいと思います。

○幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科

生活科の教科目標は「自立への基礎を養う」という非常に抽象度の高い教科目標です。「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う」というのが教科目標なんです。独り立ちするために必要な資質・能力を持たせて下さいということなのですが、明らかに方向目標です。少しずつでも大人に向かって育ってるなと最終的には見ていただきたいです。生活科の実際の授業展開では、この子たちには遊び単位を通して、自分に自信が持てて「僕は、今日こういう遊びをしました。」と、人前で自分がやったことを発表できる、自己表現力を身に付けさせようという行動目標を立てることが生活科においては何の問題ありません。つまり、独り立ちするための資質・能力を到達目標として設定しつつ、独り立ちに向けて育っているかどうかという方向性を、最終的には見極めていただきたい。まさに子ども理解していただきたいというのが生活科の教育目標なのです。すなわち

生活科の教育目標は「到達目標を内に含んだ方向目標」です。最終的には自立への基礎を養うという方向目標なのですが、そのためにどんな資質・能力が身に付いているか、一人一人の子どもの育ちをしっかりと見ながら学習を展開しようということです。方法に関しては当然、**間接教育中心**です。生活科の場合、教科書中心の学習ではないです。つまり**教科書は副読本**みたいな感じで、こういう活動もあるのか、こういうおもちゃも作れるのかという刺激になるので、資料として使って下さい、という話です。ですから間接教育によって、子どものやる気をいかに引き出すかが問われます。「秋をみつけよう」に象徴されますように、物的環境や人的環境をしっかりと意識して授業を展開します。でも、小学校ですから、公園から教室に戻ったら、今日どういうことやった？、と今日を振り返ります。幼稚園でも振り返りますね。小学校の場合は学習シートに書いて、文字で記録を残します。「これ1枚ずつ持って行ってね」「1枚終わったら2枚目もあるよ。」などと、**直接的な指示は極力控えながら、適宜、直接教育も行うのが生活科**です。

評価論からいいますと、**生活科でも一番大切なのは幼児教育で大事にしてもらいたい個人内評価**です。「太郎ちゃん4月に来た頃、恥ずかしがりやで人前で何にもしやべれなかったけれど、この3カ月でお友達もいっぱいできて、遊びも上手になって、人前でちゃんと話ができるようになったね。偉いね。」と伸びを認めて褒めて下さいと、小学校低学年の先生方にいつもお話ししています。まさに個人内評価です。このように生活科というのは、到達目標を内に含んだ方向目標、中心は間接教育だけど、適宜、直接教育も取り入れる。そして個人内評価を一番大切にしつつも、最終的にはA・B・C評価を書かなくてはならない。このように、**幼児教育と小学校教育の両方の性格を合わせ持った教科が生活科である**と捉えて下さい。

生活科を中核において、小学校に入学した直後の1ヶ月間において、特別なカリキュラムを作して下さいと生活科の解説書に書き出されている訳ですが、それが**スタートカリキュラム**です。それに対して、スタートカリキュラムを意識して幼児教育の最後の半年間の小学校に向けてのカリキュラムが、横浜市教委が名前を付けた**アプローチカリキュラム**です。そして、6カ月＋1カ月の計7か月を**接続期カリキュラム**と文科省が呼んでおり、それに向けての研究や取り組みが進められています。

○遊びの持つ意義

ここで、遊びの意義について確認させていただきます。直接的には5歳児と1年生の学びをつなぐ重要な要素で、生活科にも遊びの要素が非常に多く、幼児教育と小学校教育をつなぐ重要な意味を持つのが遊びだと思っています。

遊びとは、自分で決めた課題、私はそれを「内なる課題」とよんでいるのですが、内なる課題を自分の力で解決しようとする自己実現体験と捉えています。「今日は木登りするぞ。」一日目は途中であきらめました。2日目「よいしょ、よいしょ。やったー。」これが達成感です。自分で決めた課題を自分で実現できると、「やったー」という達成感や成就感が持てます。そういうものを大いに体験できるのが遊びだと捉えていただきたい。**自己実現による達成感、成就感、まさに体験が自己肯定感に結び付く**と思っています。自己肯定感とは「**僕だってやればできる。私だって頑張ればできる。**」だから私、次の遊びはここまでやりたい。」

「もっと高い木に登りたい。」とか、次の活動へのやる気を引き出せるわけです。それが**生きる自信につながり、これは主体性の源**です。「僕だってできる」「私だって頑張ればできる」という自己肯定感を持つことで、生きる自信につながり、**生きる力の基礎**につながっていくと思います。それに

対して小学校というのは、国語の漢字学習に象徴されますように、1年生はこれだけ覚える、2年生は・・・6年間かけてこれだけ覚えさせなさい。多くの場合は、「覚えたいから先生教えて下さい」でないんですよ。教科書に書いてあったから、先生からすれば指導要領に書いてあるから覚えさせなくちゃいけない。つまり、子どもからも教師からも、外から来る課題なのです。**内なる課題への対応力を幼児期に積み上げていくことで、自己肯定感や生きる力の基礎ができます。それによって自信が持てるからこそ、小学校以降の外からの課題にも対応できるようになるのです。そして、その間をつなぐのが生活科です。**

まさに子ども達が自分なりに、こういう遊びに取り組みたい、絶対やりたいと思わせるような**環境設定を工夫**していただいて、子どもなりの内なる課題をしっかり引き出していただきたいし、さらにどのような**言葉がけ**をするかによって、この子どもたちは本気で自分の遊びに取り組んでくれるだろうかというのを考えてください。**客観的には外からの課題かもしれないけれど、それを内なる課題として、もう一回、自分なりにしっかり受け止めて解決、実現に立ち向かうことができないと、本当の生きる力、主体的な人生を生き抜く力にはつながらないと思います。遊びというものが人生の根本課題に対応するための原体験**と書いたのは、私なりの**遊びの意味付け**です。

つまり幼児期、小学校低学年、生活科を含めて、遊びという体験で自己実現を大いにやったという自信を持って、初めて人生の根本課題に対応して生きる力、自信につながると思っております。幼児教育の皆さんには、環境設定や言葉がけの仕方などを考えて、子ども達がより自主的に、自分の内なる課題を自分で決められるような、生活科でもよく言っているんですが、**自己選択、自己決定**のチャンスを大いに子ども達に提供していた

だきたいと思います。**内なる課題に基づく遊び中心の生活**ですから、これをもって**子ども達の主体性を本当の意味で築けるという立場にあるのが幼児教育の教師**だと捉えていただきたいと思います。小学校における学びの質と異なり、**内なる課題への対応力**を幼児教育の先生方である皆さんに付けていただきたいと思います。遊びの持つ意義について語らせていただきました。

○アプローチカリキュラムについての提案

先にも述べましたが、アプローチカリキュラムとは、幼児教育の最終段階である5歳児の後半(10月～)における、小学校入学後を意識したカリキュラムです。この名称で全国的に知られています。文部科学省では、この**アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの両方を含めて接続期カリキュラム**と呼んでいます。小学校進学後を意識したカリキュラムの内容としては、保育所の場合、午睡(お昼寝)をなくすこと。それは小学校入学後の生活リズムと全く違ってくることを意識しての**お昼寝中止**ということです。一方、幼稚園を含めたアプローチカリキュラムでは、**集団による遊び**を取り入れることを提案します。また、話し合いや友達の前で自分の考えを語るような**集団活動**を取り入れる。**給食の時間を小学校の時間に近づける、椅子に座って先生や友達の話聞く**などが考えられます。具体的には、「クラス全員で遊びたい遊びって、皆どんなのがある?」と聞くと「鬼ごっこやりたい。しっぽとりやりたい。」など5つから6つ位出ますよね。子ども達から出された希望を、願いを受け止め、受け入れてやる。要するに幼稚園教育のいい点であるし、大事な点でもあるし、価値のあることだと思うんですが、**一人一人の思いや願い、やる気、内的課題を重視するのが幼児教育**です。小学校に行くと、**現実には学級活動が中心**なんです。従順さを求めるとありましたが、ただ先生の言うことを聞くというよ

りは、学級活動での活動が中心になりますから、その辺の生活習慣をわかってもらいたい、慣れてもらいたい。そのための集団による遊びを取り入れていただきたいです。

今、先生方もやってらっしゃると思いますが、お帰りの時間に、今日何をしたか人前でしゃべったり、誰々さんとかいうことやった、こういう人間関係ができたなどという、人前でちゃんと喋れる活動を取り入れていただきたいです。

昼食時間を小学校時間に近づけると書きましたが、5歳児さんになると、12時くらいになるような食事時間の変更、流れを変えていただきたいのです。椅子に座って先生やお友達の話を聞くと書きました。例えばお帰りの会の時、椅子に座ってお友達の話を聞くとか、これはまさに経験です。新しい生活環境に少しでも慣れるようなプログラム、カリキュラムを作ってほしいというのが、ここでお伝えしたいことなんです。

3月まではリーダーシップを発揮して主体的に動いていた子ども達が、4月になると何もできないという赤ちゃん扱いされるのは明らかに間違いですので、小学校の先生方に伝えたいこと、大事にしてもらいたいのは、**主体性重視**です。自分からいろんなことに関わる、進んで挨拶するとか、まさに主体性と積極性を育ててください。

小学校の先生には、幼稚園、保育園の先生方が幼児一人一人にどう対応しているか、まさに子どもとの関わりの仕方、捉え方を知ってもらいたいと思います。幼稚園の先生方も小学校の先生方と交流してアピールしていただきたいと思います。子ども達の願いや思いを大事にして、それを受け入れて、子ども達の主体的活動をしっかり見守ることで、言葉の力や数量の力、科学的な力、あとは人間関係、集団活動での対応力、そういうものが大いに育てられると思いますので、自由遊びを重視していただいて、課題に取り組むことで、い

ろんな力が育つことを見取っていただき、理解していただきたいと思います。子ども同士の連携もそうですが、先生同士の連携もお願いしたいです。

○学びのIn・About・For

子ども達の成長を連続的に捉える「学びのIn・About・For」の話をさせていただきます。幼児教育から小学校、中学校までの問題じゃなくて、生涯学習にもやがてはつながっていくと思っています。「In・About・For」とはイギリスの環境教育の用語です。私に言われますと「**体験や活動を中心とした学習活動の流れ**」の象徴です。

Inというのは学習対象である場所に直接入りこんで、**実感を伴って理解するための体験活動を象徴**するものです。今から20年前ドイツを訪れた時、緑の中に所々立ち枯れている樹木が見えたんです。「あれはどういうことですか」と聞いたら「あれは、酸性雨の結果ですよ。」と言われました。小学生であれば、初めて聞いた酸性雨について調べました、となるでしょう。「酸性雨について」「〇〇について」、これが**About**です。**調べ学習の象徴**です。小学生が調べて、次のことが分かりました。酸性雨というのは二酸化炭素が原因だそうです。そこで僕は森のために何ができるか考えました。課題解決のために、自分の学習対象になった森のために何ができるかを考えるのが**For**です。**獲得した情報に基づく思考活動の象徴**です。

実際学習対象になる場所、環境の場所に直接入りこんで、体験を通して認識するのがInの活動。そこで得た課題について調べ学習するのがAbout。そして、得た情報をもとにどうしたらいいのか考えるのがForの活動です。

以上のように体験や活動を重視した活動の流れを象徴するのがIn・About・Forです。それをもとに子どもの発達段階に応じて、どんな

ことを一番重視し、その活動を通して、どういう力を育てるのが一番重要なのかを知るために考えたのが、私の「**学びのIn・About・For**」理論であり、書き出した図をもとにお話します。子どもの育ちを連続的に見取り、**全人教育につなげるためのIn・About・For**です。

幼児期から小学校低学年にかけては、自分で決めた内なる課題にしっかり入り込んで、没頭して、夢中になって、浸りきって、遊びに取り組んでもらいたいと考えました。ここでのInは**精神的な意味を含めたIn**です。この時期の「自己中心性」とは、自分にとって身近な課題はすぐに取り組んで、知識や技能を身に付けられるものです。その結果、「僕は〇〇が好きです」「私は〇〇が得意です」と、自分を主語にして語ります。これが**主体性の始まり**です。まさに、**人生を主体的に生き抜くスタートラインにあたるのが小学校入学直後のスタートカリキュラム**であると考えています。その前提となるのが幼児期の遊び、体験だという風に捉えていただきたいと思います。だからこの時代には、自分で決めた課題、客観的には外からきた課題かもしれませんが、自分なりに受け止め直して、自分なりにしっかり没頭、集中できる課題を大いに提供していただきたいと思います。

今、目の前にいる3歳児さん、4歳児さん、5歳児さんにどんな力を付ければ、やがて小学校低学年、中学年、そして高学年でこういう力まで付くんだろうかということを考えてもらいたいのです。事例をお話します。当時の新潟県頸城村くびきむら（現在は上越市）の大養小学校というところで、当時の頸城村の他の2つの小学校と一緒に3校合同で5年生が稲作づくりに基づく体験学習を行いました。1年間の「総合的な学習の時間」実践です。その1年間をまとめる発表会が2月の末に行われました。それは単なる体験報告会ではなく、午前体験発表、午後は分科討論会、ということで「米々

サミット」という单元名でした。いくつかのテーマに基づいて、5年生同士で意見交換しようという企画です。

私は、1つの分科会を決めて入らせてもらいました。それは、「農薬使用の是非、農薬を使うことに賛成するか、反対するかという農薬使用について」の分科討論会でした。そこには当時、頸城村の専業農家のお父さんも来てくれて、いわゆる地域の先生として最後にコメントをもらいましょうということで、討論会が始まりました。各学校から3人ずつ代表が出てきて発表するという討論会のやり方でした。「農薬には毒が入っていて、人間の体に悪い。だから僕は農薬使用に反対します。」「私は農薬を使うことに反対します。」など大養小以外の2校の6人が次から次と言いました。その後、学校の先生に聞きましたら、1校では「バイオテクノロジー農法（バイテク農法）」というのを勉強したそうです。その農法であれば農薬は使わなくてもいいということになったようです。一方は「米ぬか農法」というのを勉強したとのこと。土に米ぬかを混ぜると土が強くなって雑草が生えなくなるのだそうです。それで農薬は使わなくていいことになったらしく、大養小学校以外は、自分達が勉強したことを踏まえて、農薬使用に反対だということでした。

最後に大養小の代表のうち2名の男児が次のようなことを語りました。

「農薬に毒が入っていて人間の体に悪いのは、僕も分かっています。でも今の頸城村の農業の実態は、①ほとんどの農家が、お爺ちゃん、お婆ちゃん中心の兼業農家であり、完全に人手不足です。またお年寄の体には大きな負担がかかります。②頸城村の農業の実態のもう一つは、ほとんど兼業農家ではあるけれども、赤字か黒字かギリギリのところにあって、これ以上米の収穫量が減ったら、頸城村の農家は全部赤字に転落してしまいま

す。だから、毒が入っていて体に悪いのは分かるけれど、僕は農薬を使うことに賛成します。」

J Aに出かけて、まさに情報収集のための取材をやったようです。これは、今皆さんの目の前にいる**5歳児さんのたった5年後の姿**です。これだけ自分で決めた課題に、しっかり主体的に取り組んで、しっかり情報を直接的に集めて、人前で語れるような表現力まで付いています。2人の男児の担任の先生から伺ったところ、この2人とも兼業農家の息子たちだそうです。やがて、例えば高校が終わって頸城村に残った時に、自分は農業を引き継ぐか、引き継がないかを真剣に考え始めたと言っていました。これって**自己の生き方**です。あとは農薬問題は環境問題でもあります。地球のために農薬を使うことは、どういう悪い面、良い面があるかとか、頸城村の農業をどうやったら発展させられるか真剣に考え始めたと言っていました。まさに自分の決めた課題に真剣に取り組んで、自分で集めた情報をもとに考え、人前でしっかり語って、やがて自分は、自分の家でお爺ちゃん、お婆ちゃんが続けている農業をどうしようかと真剣に考えるに至ったのです。これが、5歳児の5年後の姿、10歳児の姿なんです。ぜひこんなことを意識しながら、小学校高学年になるとこんな力が、思考力や、実行力が付くんじゃないかと考えていただきたいです。3人目は女の子でした。「私はアイガモ農法で農業をやりたいので、農薬を使うことに反対します。」と言いました。

最後に、地域の専業農家のお父さんが言ってくれました。「実は自分も無農薬の方が理想だと思っていますが、現実的には厳しく、なかなか無農薬では、ちゃんとした収穫ができません。ですから自分としてめざしているのは減農薬農法です。」と語ってくれました。さっきの男児の話にもつながります。つまり、5歳児の5年後には、大人にも通用するような考えと意見を述べられるまで育つ

ことができるということです。そのために、今、皆さんの前にいる5歳児に、どんな力をつけたいですか。まさに集中力、主体性を育てること。それがやがてこんな思考力や実行力、表現力までつながるんじゃないかと捉えていただきたいと思います。これからの幼児さん達の育ちを予測してみてください。

○ “Teacher” と “Educator”

まさに**幼児教育**から始まって、**生活科**や**総合的な学習**は、**子どもを全人的に捉えます**。そして**生きる力を育てようとしている教育活動**です。

ここで皆さんに提案させていただきたいのは、日本語で「教育する」と訳される“educate”の意味です。“educate”の元々の意味は「**引き出しを開ける**」です。外から見て何が入っているかわからないものを引き出して中身を明らかにするのです。ですから教育学の見地からしますと「潜在的な力を引き出して顕在化する」「内なる力や思いを外に引き出してあげる」**最終的には「子どもの可能性を引き出してあげる」という意味**を持っていると捉えていただきたい。幼児教育をはじめとして、生活科や総合的な学習で最も大切なことは、子どもの思いや願い、興味・関心、意欲、好奇心、探究心、自己表現力等々、これら**全てを「引き出してあげる」教師の姿勢**なのだと思います。幼児教育の先生方はこういう話に全く抵抗がないと思いますが、小学校以上になりますと、教えるのが教師と思いこんでいる場合が多いので、強調しています。従って、幼児教育・生活・総合で子どもを育てようとする時、教師の心構えとして大事なものは「教える」だけではなく「引き出す」ということです。最後に次のことを提案して話を終わらせていただきたいと思います。

“Teacher” もいいけど、
“Educator” をめざしましょう。